日本語日常会話の自己修復過程におけるフィラー的形式の使用
ー同一順番内もしくは順番移行適切場における修復の前置きとしての「あのー」「そのー」「ええと」[1]ー

高木智世(筑波大学)　森田笑(シンガポール国立大学)

1. はじめに

発話者の自己開始自己修復（self-initiated self-repair; Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977）の過程において，一つの順番（turn）内，あるいは，順番移行が適切になる場所（TRP; Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974）で修復が開始された後，次の例にあるように修復の実行の前にしばしば修復の前置き（repair preface; Lerner and Kitzinger, 2015)として「あの（ー)」「その（ー)」「ええと」のようないわゆるフィラー的形式が用いられる.

(1) [TalkBank:JAPN2167]
にほ- あのアメリカの::,学生::(0.4)生活みたいなのをね¿

ここでは,「あの（ー)」が，トラブル源（trouble source）である「にほ-」の後，かつ，修復の実行部分（repair solution)である「アメリカ」の前に生じている．本研究では，自然会話から収集した多数の事例を詳細に分析することを通して，このような位置に生じるフィラー的形式がそれぞれ自己開始自己修復活動の構築にどのように寄与しているかを明らかにする[2]． 以下では，まず，より特定的な自己修復の環境で用いられる「ええと」そして「その（ー)」について分析例を提示した後に，それらと対比しながら「あの（ー)」が修復の前置きとして用いられる場合を分析する.

2. TCU を再構築して行為を産出し直すことを標示する「ええと」

「ええと」は，ある特定の構造で組み立てられているTCU（Turn Constructional Unit; Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974)が産出された直後もしくはその途中で修復を開始し，異なる構造のTCUに置き換える(replacing; Schegloff,2013)という操作によって修復を実行する際の前置きとして用いられている事例が顕著に多い．次の事例(2)は，ロサンゼルス在住歴の長いMがロサンゼルスに引っ越したばかりのHに対して，近隣の「レバノン料理の美味しい店」で食べられるレバノン料理について説明した後，そのレストランの場所を教えている場面である.

(2) [M&H]
01　H:　そ[れはどこにあんの?
02　M:　[( )
03　それはウエストウッドのあn- あの::ウエストウッドアベニューの:,
04　H:　うん[うんうん
05 → M:　[ええと<サンタモニカ>とウエストウッドの:角の::,
06　H:　あれか::！
07　M:　う::ん，スアードっていうところなんだけど::,

01行目の質問に応じるべくその店の場所を特定する際に，Mは，03行目でまずは通りの名前だけを提示し，次に，それが通りの名前であることを明示する「アベニュー」を挿入(inserting)している.しかし05行目では，「ウェストアベニューのX」という形式で場所を限定する試みを放棄し，その店の位置を２つの通りが交差する地点として特定するやり方に変更

[1] 本稿では，感動詞的に用いられている「あの(ー)」「その(ー)」「ええと」等を，便宜上，総称的に「フィラー的形式」と呼ぶが，筆者らはこれらの形式を単に発話の「間合いを埋めるもの」として捉えているわけではない．なお，これらの形式に含まれる母音は，実際の使用において（トランスクリプト上で示されるように）さまざまな長さや音調で産出されるが，本文においては，統一的に「あの(ー)」「その(ー)」「ええと」と表記する.

[2] 本研究では，いわゆる「言葉探し（word search)」と呼ばれる修復の過程で用いられるフィラー的形式を含む事例は取り扱わない．本研究によって引き出された知見は，基本的にはそうした事例についても適用されると考えるが，言葉探しに特有の相互行為環境の精査が必要であるため，「言葉探し」の事例を含めた総合的な分析結果の定式化は，今後の課題とする.

してHの01行目の質問に対する応答をやり直す．交差する地点の特定まで至った時点（「角の::」）で受け手Hがその店を認識できたことを主張したため（06行目），Mはそれを受け止め，再びその店を高く評価する作業に移行する．

次の事例(3)では，友人同士の３名が一緒にベトナム旅行に行く計画を立てている．Yは他の二人よりも早い帰国便に乗る事になっており，Yがベトナムに滞在する最終日の予定をどうするかを話し合っているところである．この断片の直前の部分で，「メコン川ツアー」を「どこに入れるか」が話題となり，Yは，自分のことを気にせずにツアーのスケジュールを立てるように他の二人に勧めるが，二人は，ツアーは「いつでもいい」のだと主張する．Yが，それを一旦「ふ::ん」と受け止めた後，２秒の間合いの後に，Mが01行目のように質問する．

(3)[Ho Chi Minh]

01 → M: なん- <なんにち:>? >なんだく，ええと:: 帰るのは(.)何時の飛行機?

02 Y: あたしは９時- 朝の９時hh

Mは最初に端的に「<なんにち:>?」と質問を開始する．これは，Yの帰国のタイミングをより特定的に尋ねようとする質問が開始されているように聞こえるが，Yの帰国は，他の二人の帰国日の前日であることは３人の間ですでに共有されている状況において，Yの帰国日を尋ねるだけの質問では，今ここで課題となっているツアーの日時を決める目的を達成できない．Mは「<なんにち:>?」という質問を「帰るのは(.)何時の飛行機?」と飛行機の出発時間を焦点とする質問に置き換える前に「ええと」を用いている．

以上のように，「ええと」は，「今ここ」で目指されていることが，既に開始された発話(TCU)の組み立て方では達成できない場合に，別の組み立てで行為を達成するべく修復が実行される際の，行為の再構築の前置きとして用いられている．したがって，「ええと」に先導される修復は，TCUの単位（すなわち，行為の単位）で実行される場合が多いというのも特徴的である．

3. 先行相互行為において共有された事柄への紐付けを標示する「その（―）」

「その（―）」の場合は，次に産出しようとしていることが，先行するやりとり（当該相互行為の前に生じた過去の相互行為も含む）において，受け手との間で明示的に共有された事柄に関わることであることを標示する．事例(3)は，大学生の友人同士の電話会話からの抜粋である．Kは，アルバイト以外でなるべく楽に収入を得る方法についていろいろと模索していることをMに話している．Kが別の友人から教えてもらったネットオークションを利用して収入を得る方法を説明すると，Mは，その方法は（短期で収入を得るのではなく）継続する必要がある，というデメリットを指摘する．

(4)[okane]

01 M: ずっとやらんといけんじゃん.

02 K: まあそうなんだけど::，まあ(.)でもさ::，[稼ぎ(.)稼げるわけじゃん.

03 M: [あん.

04 →K: その:(.)楽な収入で

05 M: .hhh バイトしろよ.

Kはその指摘に02行目のように反論するが，この部分だけでは，「稼げる方法」として紹介したその方法が「稼げる」と述べているだけであり，十分な反論として成立しない．このTCUが02行目末で完結可能な点（すなわち，TRP)に至った後，Kは04行目で「楽な収入で」と02行目のTCUの継続として聞ける部分を産出する．厳密に言えば，この部分は，「で」という接続形式で完結していることからも，02行目の「稼げる」の前に挿入されるべきであったものとしてデザインされている．そして，この部分を産出する前に「その（―）」が用いられているのである．この場面では，そもそも，二人は，「できるだけ楽に収入を得る方法」について話していたのであった．このように，「その（―）」は，後続して産出される部分が，先行部分においてすでに会話の「主題」として二人の間で相互に認識可能な仕方で共有されているはずのことに紐付けられるものとして聞くように，いわばリマインド標識として用いられているのである．

もう一つ事例を見てみよう．事例(4)では，来日したばかりの留学生のチューターを複数件引き受けている大学生二人の会話である．直前では，最近ふたりとも忙しいという話をしており，01行目で，Mは「2日」に（チューター業務とは無関係の）「面接」を受けることに言及している．

(5)[2012_tutor]

01 M: おれ2日なんか面接だよ?=

02 R: ん::: (.) ね:.

03 M: [ね:.

04　→R:　[わたしひとりでやるしかないよね? その(.)[なんだ（.）ウクライナの学生か.
05　　M:　　[（ないね.）

04行目でRは「ひとりでやるしかないよね?」とMに確認を求めるTCUを完結するが，すぐに，「ウクライナの学生」の対応について述べていることを明確化する．この断片の後の部分で，ポーランドからの留学生が1日，ウクライナからの留学生が2日に来るということを相互に確認しているが，いずれにしてもウクライナの留学生がその時期に来校することについては，すでに二人の間で了解されていることは明らかである．この「ウクライナの学生」に明示的に言及する部分を付け足す際に「その（ー）」を用いることによって，後続の部分が，二人の間ですでに明示的に共有されている事柄に紐付けられることを予示し，結果として，「ウクライナの学生」が，今ここで語られていることに関連する仕方で，二人の間ですでに了解されている，特定の「ウクライナの学生」を指しているという理解を可能にするのである．

このように，「その（ー）」の使用により，発話者は，先行部分で（あるいは，過去に）二人の間で明示的に（相互に認識可能な仕方で）共有された事柄を参照して後続部分を理解するよう受け手をガイドし，また同時に，二人の間で共有された事柄の履歴を把握した上でこの発話を産出していることを主張できるのである．それゆえ，「その（ー）」は，先行するやりとりに紐付けられることを敢えて「遡って」産出しようとしていることの標識として利用可能であり，TCUが完結した直後に直前のTCUについて何かを遡及的に「付け足す」修復の前置きとなる場合が多い．

4. 表現の局所的編集作業の前置きとしての「あの（ー）」

自己開始自己修復の中で用いられる「あの（ー）」は，「ええと」や「その（ー）」に比べ頻度も高く，用いられる環境も多様であるが、「ええと」や「その（ー）」が前置きとなる修復と比較することにより、その特徴が明らかになる．基本的には，修復の対象となる部分が局所的・偶発的に何らかの問題を孕むものとして捉えられ，より適切な表現へと「編集」されることを標示しているのであるが，「ええと」のように行為そのものが再構築されるわけではなく、「その（ー）」のようにすでに共有されている事柄に志向しているわけでもない．いくつか事例を見てみよう．（(1)(6)(7)は電話会話である.）

(1)《再掲》　にほ- あのアメリカの::,学生::(0.4)生活みたいなのをね¿
(2')[M&H]　それはウエストウッドのあn- あの::ウエストウッドアベニューの:,
(6)[theft]　カ(h)ード(h)はね:.hh余分にはあの管理できないほどつくらないことがいちばんいいみたい.
(7)[theft]　でそのときに: あの: いつものサトイモ?(0.3)あの: おいしいサトイモがあるんで: ng- あの: 持ってくつもりで >いるんだけど<

上記のいずれの事例においても，直前のトラブル源に対して，「あの（ー）」を用いてから置き換えや挿入などの操作によって修復が実行されている．事例(1)ではそもそも誤って産出した語句を置き換えている．事例(6)はより具体的な言い方に置き換えている．事例(2′)と(7)でも，トラブル源が「誤っていた」わけではないが，その場の状況における何らかの事情を踏まえてより適切な言い方への修復，つまり，表現の「編集」が試みられている．例えば，事例(2′)においては，「ウェストウッド」のみではエリアを指すこともあるので，通りの名称を指していることがわかるように「ウェストウッドアベニュー」としたほうが，とりわけロサンゼルスに引っ越して間もないHに対しては，より適切であろう．事例(7)では，発話者は，この電話の後に梨の直売店に出向いて自分の家族の分の梨も買ってきてくれるという受け手（発話者の姉）に対して，梨を買って戻ってきたら連絡をしてほしいと述べた上でこの発話を産出している．このような状況においては，たとえそれが実際に受け手に度々持って行っている「いつもの」サトイモであっても，そのことを強調するよりは，「おいしい」もの，すなわち，梨を買ってきてくれることに対する返礼としての価値のあるものとして持って行くことを強調したほうがこの発話を「申し出」として理解してもらうのに好都合であろう．（さらに，「いつものサトイモ?」のあとの0.3秒の間合いが示すように，「いつものサトイモ」という言い方では，受け手はそれを認識できていない可能性がある.）

事例の(2′),(6),(7)については，より適切な言い方への修復が為されているという点で，「ええと」が用いられる事例との違いが問われるが，以下の点において，「ええと」が修復の前置きとなる場合とは明確に異なる．修復の実行が「ええと」に先導される場合，そのターンで実現しようとしている行為の達成のために，その行為（発話）の組み立て全体が再編される．一方，事例(2′),(6),(7)のように「あの（ー）」によって先導される修復は，より具体的・適切な言い方へ変更されているが，あくまでもそのときの局所的・偶発的事態への対応として，用いられた表現の一部が編集されるものであって，行為の達成のやり方そのものは変更されていない．例えば，(6)は「余分には」が「管理できないほど」に置き換えられているが，発話者がここで行なっている主張がより具体的・特定的に表現されたに過ぎず，主張のやり方そのものが変更されているわけではない．また(7)の例では「いつものサトイモ」が「おいしいサトイモ」に修復されているが，ここでも「サトイモを持っていく」という申し出の行為自体をやり直しているのではなく，申し出の対象としての「サトイモ」の

描写の仕方を，申し出という行為においてよりふさわしいものへと変更しているにすぎない．このように，「あの（ー）」と「ええと」は，繊細に，しかし，明確に使い分けられているのである．この点は，事例(2)において同じMの発話（TCU）の中で「あの（ー）」と「ええと」が使い分けられていることにも先鋭的に示されている．

また，「その（ー）」が，先行する相互行為で明示的に共有された事柄と紐付けられることを導入する修復の前置きとなることに対して，「あの（ー）」にはそのような性質が見られないことが，次の例に明確に示されている．

(8)[New Year]

01　S: いや:::，アパートばっかりですよ.

02　Y：ね.

03　→S：J大学が越してきて．あの体育学部が.

Sは自分が住んでいる場所の様子が変化してきていることについて話している．03行目の「越してきて.」で一旦TCUが完結可能な点に至った後に，そのTCUの延長として補足部分が産出されているように見えるという点で事例(4)や(5)と極めて似た環境において「あの（ー）」が産出されているように見える．しかし，「体育学部が」の部分は，「が」が付加されていることから明らかなように，直前のTCUに対して補足的に追加されるものとしてではなく，そのTCUにおける主語である「J大学が」を置き換えるものとして産出されている．（J大学全体がSの居住地近隣に引っ越したわけではないので，「J大学」という言い方は正確ではない．ただし，「J大学」が「体育学部」とそっくりそのまま置き換えられるべきものだとしても，受け手には，当然ながら，「J大学の体育学部」を指していることがわかる.）そして，この「J大学」「体育学部」は，この二人の間の相互行為においてこの時点で初めて言及されており，「体育学部」が紐付けられる先となるような二人の間ですでに明示的に共有された事柄は存在しない．以上のように，発話が途中で中断され，「あの（ー）」が前置きとなって修復が実行される場合は，端的に言い誤った語句を正しいものやより正確なものに置き換えたり，今ここの局所的・偶発的な相互行為的事由への対処としてよりふさわしい言い方への「編集」が行われているのである．

5. まとめ

自己開始自己修復の過程で修復を開始する際に，「ええと」「あの（ー）」「その（ー）」といった言語資源を修復の前置きとして使い分けることにより、発話者は，修復の範囲や水準、受け手と共有される事柄との関連などを示し，後続の部分が，相互行為上のどのような側面に志向しているもので，どのよう修復として聞かれるべきなのかということについてきめ細やかなガイドを受け手に提供することが可能であることが明らかとなった．なお，本稿で概括的に論じた「ええと」「あの（ー）」「その（ー）」の修復の前置きとしての働きは，すでに会話分析的研究（Morita & Takagi 2018, 2020; 高木・森田 2015, 2018）によって明らかにされた，他の位置で生じるこれらのフィラー的形式の相互行為的働き（i.e.「ええと」が今ここで求められる行為を最大限に適切な仕方で産出することに志向していることを示すこと，「あの(ー)」が進行中の連鎖やTCUの軌道からの離脱を標すものであること，それに対して，「その（ー）」が先行発話や先行文脈の延長として何かを導入しようとしていることを予示するものであること）との連続性を示している．

参考文献

Lerner, G. H., & Kitzinger, C. (2015). Or-prefacing in the organization of self-initiated repair. *Research on Language and Social Interaction*, 48(1), 58–78.

Morita, E., & Takagi, T. (2018). Marking ‘commitment to undertaking of the task at hand’: initiating responses with *eeto* in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 124, 31-49.

Morita, E., & Takagi, T. (2020). Interjectional use of demonstratives: *Anoo* and *sonoo* as resources for interaction in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 169, 120-135.

Sacks, H., Schegloff, E.A. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50, 696–735.

Schegloff, E. A. (2013). Ten operations in self-initiated, same-turn repair. In M. Hayashi, G. Raymond & J. Sidnell (Eds.), *Conversational Repair and Human Understanding* (pp. 41–70). Cambridge, Cambridge University Press.

Schegloff, E. A, Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53, 361-382.

高木智世・森田笑 (2015).「ええと」によって開始される応答　社会言語科学，18(1), 93–110.

高木智世・森田笑 (2018). 相互行為資源としての「あのー」および「そのー」．第41回社会言語科学会研究大会予稿集.